

ヨハネの手紙第一4章11-12節 「互いに愛し合う理由」

1A これほどまでの神の愛 11

2A 見えない神の愛 12

1B 神のご臨在

2B 全うされる愛

本文

ヨハネによる手紙第一 4 章を開いてください、私たちの学びは 4 章 10 節まで来ましたが、今晚は、11-12 節を見ていきたいと思えます。「¹¹ 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです。¹² いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。」私たちは、神の命令である、「互いに愛し合うこと」(3:23)を見ていっています。

1A これほどまでの神の愛 11

ヨハネは、再び「¹ 愛する者たち。」と言っています。彼は長老として、同じ兄弟として、手紙を呼んでいる兄弟たちを愛していました。同じように、彼らが互いに愛し合うことを願っています。7 節で既に、「愛する者たち。私たちは互いに愛し合ひましよう。」と言っていました。繰り返して、呼びかけています。

そして、ここでは互いに愛し合う理由をヨハネは述べています。「神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら」ということです。「これほどまでに」というのは、どれほどまでに、なのでしょう？それが 9-10 節で話していました。「⁹ 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。¹⁰ 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」私たちは、神が御子を下さることによって示された愛、これを何度も何度も、思い巡らす必要があります。イエス様は、ご自身の裂かれた肉と、ご自身の流された血を思い起こすために、過越の食事のパンとぶどう酒を、それぞれご自身の肉、ご自身の血を取って食べるために残されました。聖餐式ですね。教会として、私たちはその時は共に思い起こすことができるし、私たちは、一人一人が思い起こす必要があります。

この愛があるからこそ、互いに愛することができますし、この愛によって初めて愛し合いなさいという命令を守らないといけません。私たちの努力や知恵でキリストの命令を守るといっても、たかが知れています。弟子たちにイエス様が、兄弟が罪を犯した時に、「行って二人だけのところで指摘しなさい」と言われました。その話を聞いたペテロは、「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、

何回赦すべきですか。七回まででしょうか。」と尋ねました。人がイエス様の命令を守るといっても、どんなに最善を尽くしたと想像できるものと言っても、たかが七回なのです。いや、七回も赦せたら、すごいですね。三回目の正直ではないけれども、三回、同じことで罪を犯したら、この人は全然、悔い改めていない。もう赦すことはやめようと思うはずですが、イエス様はペテロの、最善の努力を、完膚なきまで粉碎されます。「わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。」と言われました。

そこで、「**神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら**」を思い起こすべきなのです。神の命令を守るとは、私たち人間の能力で行うものではないことを分らせるために、イエス様は天の御国の喩えを語られます。王に、家来が一万タラントの負債のある者をかわいそうに思い彼を赦し、負債を免除しました。一タラントは、6千デナリに相当し、一デナリは一日分の労賃です。一タラントで、6千日分の労賃に相当し、ですから一万タラントは、6千万日の労賃、16万4千万年の労賃です。天文学的な負債、借金だったのです。しかし王はそれを帳消しにしたのです。これが、「**神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら**」ということですね。無限の数の罪を神に対して犯して、それらを一切、赦していただいたのです。

しかし、この家来は仲間の家来に百デナリを貸していました。百日分の労賃の金額です。これおを赦さずに、負債を返すまで牢に放り込んだのです。これが、私たちが兄弟を赦さない姿です。一回、二回の罪で赦さないということは、無数の罪を神から帳消しにさせていただいたという愛をないがしろにしているのです。その話を聞いた王は、その家来が負債をすべて返すまで彼を獄吏たちに引き渡したのです。そしてこう言われました。「18:35 あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。」私たちは、神がどれほどまでに私たちを愛してくださったかを覚えて、それから、兄弟と交わっている中で、キリストの愛を実践するのです。

2A 見えない神の愛 12

「**12** **いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。**」私たちが互いに愛し合う、次の理由は、目に見えない神が愛し合う仲でご臨在されて、この方がその愛の中で見えるようになり、また、神の愛が御子に現れただけでなく、私たちの互いの間で全うされるためだ、ということです。

私たちは、神は霊であられ、この方は目に見えないことを知っています。神には、目に見える形はないことを、何度となく教えられています。もし見える形があるならば、それは偶像です。しかし、神は同時に、ご自分を現したいと願われておられます。この前の礼拝で、ローマ人への手紙 1 章を読みましたが、「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められる(1:20a)」とありました。神がおられることが、

被造物を通して知られているということです。神は目に見えない方ですが、目に見えるものを通してご自身を示したいと願われています。

ところで、ヨハネは、福音書の中でもはっきりと、御子以外に神は見たことがないと言っています。「ヨハ 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」ひとり子の神のみが、父なる神を見ていました。その懐におられました。御子はその神を説き明かされ、肉体においてこの方を見せてくださいました。パウロはテモテへの手紙第一で、神は見えない方であることを述べています。「I テモ 6:16 死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。この方に誉れと永遠の支配がありますように。アーメン。」

けれども、「神を見た」と言っている人の証言が、旧約聖書の中にありますね。ヤコブが、主の使いと格闘した後で、「創 32:30b 私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」と言いました。ギデオンも、主の使いと会った後で、こう言っています。「士 6:22b ああ、【神】、主よ。私は顔と顔を合わせて【主】の使いを見てしまいました。」けれども、二人とも、主の使いを見たのであって、主ご自身ではありませんでした。主の使いであるのに関わらず、主ご自身が現れたというのは、この方が肉体を取られる前のキリストの現われであるということもあり得ます。

モーセについて、「出エ 33:11 主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。」とあります。けれども、こども、友と語るように主と語っていたという親しさを表しているのであり、実際に、神を見たのではありません。その証拠にモーセと主は次の会話をしていました。モーセは、「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」と言いました。主は、「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」と答えられました。そして、後ろ姿は見せることを約束されました。「わたしが手をのけると、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は決して見られない。」(出エジプト 33 章)

このようにして、神を見たという人は、この方のふところにおられた独り子の神であるキリストのみであり、だれも神を見た者はいないのです。

1B 神のご臨在

けれども、「**私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり**」とヨハネは言っています。私たちが、神の愛に感動し、応答し、互いに愛し合っている時に、そこに、神がとどまってくださいます。その間に住んでくださいます。目に見えない方が、兄弟たちの互いの愛の中で見て取れる、ということでもあります。イエス様は、ご自分の名によって二人、三人で祈るところには、そこにおられることを約束されましたが、互いに愛するところにも留まってくださいます。

東日本大震災が起こって、ある人からこんな質問を受けました。「どうして、神はこんな悲惨なことをお許しになられたのか？神は、被災地の方々にとって、どこにおられるのか？」私は、その時、忙しく準備をしていました。そこに行く準備です。その答えを知っていたからです。「神は、そこにキリスト者を遣わして、ご自身がそこにおられることをみこころとしておられる。」ということです。キリスト者がそこにいて、助け、慰める働きをしている中で、そこにおられる方々は神がおられることを知ることができるのです。

神について、聖書についての緻密な説明を聞いてそれで神がおられることを知ることになると思っている人がいます。けれども、ここではっきりと書いてあるように、互いに愛するところに神が留まっておられるのです。だから、どれほど互いに愛するという命令を守ることが大事かも知れません。ここで、イエス様が、エペソにある教会に対して、「初めの愛から離れてしまった。」と言われた言葉を思い出します。悔い改めなさいと命じられますが、「悔い改めないなら、あなたの燭台をその場所から取り除く。」と言われました(黙示 2:5)。つまり、イエス様がその教会にはご臨在されないということです。イエス様のおられない教会とは、恐ろしいことです。けれども、互いへの愛の命令を守っていなかったら、イエス様はおられないのです。この恐ろしいことが、兄弟を憎む、悪口を言う、愛を示さない、いつまでも赦さないなどのことをやっていたら、現実になっていることを知らないといけません。

2B 全うされる愛

そして、「**神の愛が私たちのうちに全うされるのです。**」と言っています。神の愛は、御子において現れていることを私たちは知っています。けれども、神の愛の目的は御子によって示されただけでは終わりません。私たちが互いに愛するところまで至って、初めて全うされるのです。イエス様が祈られた時、ご自身と父が一つであるように、彼らも一つになるようにと祈っておられるところがあります。「ヨハ 17:23 わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。」これと同じように、父が子を愛され、子が父に従うその関係が、私たちの間にも広がって、それで神の愛が全うされるのだということです。ただ、御子にあってそれで神が示されただけでなく、神の愛は互いに愛するというこまでいって、初めてその目的が達成されます。

おそらく、当時はグノーシス主義的な偽教師が、自分たちは神を見たというような、特別な知識を吹聴していたことでしょう。けれども、そこには愛がないのです。他宗教も、「私は神を見た」に似た発言をします。けれども、神を見るときは、キリストが自分の罪のために死んでくださったその愛が心に注がれて、それで互いに愛し合うところに見ることができるのです。私たちは、そのことに心を注いでいきましょう。